

**平成29年度第1回
松本市・山形村・朝日村中学校組合
総合教育会議議事録**

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

平成29年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議議事録

平成29年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議が平成29年12月25日午後3時松本市役所第一応接室に招集された。

議 事 日 程

1 開会

2 あいさつ

3 自己紹介

4 議事

懇談項目

『信州型コミュニティスクール鉢盛モデルについて』

【紹介】

鉢盛中学校のコミュニティスクールの現状について

【講話】

コミュニティスクールと新しい地域づくり

ー地域学校協働活動と子どもに求められる未来を生きる力ー

5 閉会

出席者名簿

【会議構成員】

管理者（松本市長）	菅 谷 昭 君
教育長（松本市教育長）	赤 羽 郁 夫 君
教育長職務代理人（山形村教育長）	根 橋 範 男 君
教育委員（朝日村教育長）	二 茅 芳 郎 君
教育委員（山形村教育長職務代理人）	平 林 昌 廣 君
教育委員（保護者委員）	大 森 志 保 君

【オブザーバー】

東京大学大学院教育学研究科教授	牧 野 篤 君
-----------------	---------

【学校長】

鉢盛中学校長	湯 本 武 司 君
--------	-----------

【事務局職員ほか】

事務局長	矢 久 保 学 君
事務局次長	小 林 伸 一 君
事務局次長	麻 田 仁 郎 君
事務局次長	横 田 則 雄 君
事務局次長補佐	甕 国 人 君
事務局次長補佐	中 村 三重子 君
事務局主事	深 澤 亮 平 君
山形村教育委員会	上 條 憲 治 君
朝日村教育委員会	清 沢 光 寿 君
松本市生涯学習課課長補佐	金 井 稔 君
松本市教育政策課主査	三 澤 良 彦 君
松本市生涯学習課主任	中 山 勇 太 君

- 事務局次長（小林伸一君） ただいまから平成29年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

議事に入りますまでの間、私、事務局次長の小林が進行を務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は、公開といたしまして、お手元の次第により進行いたしますのでお願いいたします。

最初に、この会議を主催いたします菅谷管理者からご挨拶をお願いいたします。

- 管理者（菅谷 昭君） お疲れさまでございます。

それでは、一言ご挨拶申し上げます。

今年も残すところあとわずかとなりましたが、仕事納めなどで何かとお忙しい中、赤羽教育長並びに教育委員の皆様には、ご出席いただきまことにありがとうございます。

また、皆様方には、日ごろから当中学校組合の教育行政の推進に格別なご尽力を賜っておりますことに、この場をおかりして感謝を申し上げます。

ご案内のとおり、昨年度の総合教育会議では、鉢盛中学校の現状と、そして今後への期待をテーマといたしまして、湯本校長先生をはじめ、教育委員の皆様方それぞれのお立場から、子どもたちの様子や、また今後への期待などにつきましてお話をお聞きし、有意義な懇談が行われました。

さて、当組合では、学校と地域が一体となったコミュニティスクールの運営と、学校の多忙化解消に向けた校務支援を行いながら、地域の担い手となる学校づくりを推進するため、統括コーディネーターを平成30年度から学校に配置することといたしました。これは、管理市であります松本市の中学校でもまだ行われておりませんで、先進的な取り組みでございます。

そこで、本日は、信州型コミュニティスクール鉢盛モデルについてを懇談項目といたしまして、社会教育、生涯教育を専門とされております東京大学の牧野教授から地域学校協働活動などについてのご講話をいただき、学校と地域が一体となって、地域づくり並びに学校づくりを進められる新しいコミュニティスクールにつきまして、教育委員の皆様方と意見交換をしていきたいと思っております。

今後も、この総合教育会議を通じまして、教育委員の皆様方と共通の理念や相互の連携を深め、鉢盛中学校の教育のさらなる充実に向けて取り組んでまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

- 事務局次長（小林伸一君） ありがとうございました。

続きまして、赤羽教育長からご挨拶をお願いいたします。

○教育長（赤羽郁夫君） それでは、松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議の開催に当たりまして、教育委員会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

1市2村の小学校では、それぞれ地域のボランティアの皆さんに支えられて、活力ある素晴らしいコミュニティスクールが実施されています。そして、それぞれの地域とのかかわり方が異なる生徒が鉢盛中学校に集まっているという現状であります。

3市村の教育長さんも含めまして、構成する当組合の教育委員会では、それぞれの小学校を基盤に、一層地域とともにある学校づくりを進める新たなコミュニティスクールのあり方を研究してきたところであります。

そうした折、ただいまの管理者のお話もありましたように、地域の担い手となる学校づくりを推進するために、来年度から統括コーディネーターを配置していただくことになりました。日常生活の中から、子どもたちが生きる力を学び、子どもたちの成長を支えていける鉢盛モデルとなりますことを期待しますとともに、管理者のご理解に深く感謝をいたすところであります。

教育委員会といたしましても、鉢盛中学校の生徒の健やかな成長のため、これまでの関係をまた大切に引き継いでいきたいと思っています。今後とも格別のご理解、ご配慮をお願いできたらと思っています。

以上、簡単であります、冒頭に当たりましての挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いをいたします。

○事務局次長（小林伸一君） ありがとうございます。

それでは、自己紹介に入りたいと思います。

本年7月と11月に教育委員さんが変わられております。そこで改めて自己紹介をお願いしたいと存じます。

お手元に、今会議の出席者名簿がございます。この名簿の順に従いまして、まずは根橋委員さんから自己紹介をお願いいたします。

○教育長職務代理者（根橋範男君） 山形村教育長の根橋と申します。よろしくお願いいたします。

○教育委員（二茅芳郎君） 朝日村教育長の二茅芳郎と申します。中学校組合の教育委員をやっております。

○教育委員（平林昌廣君） 山形村教育委員会の平林と申します。よろしくお願いいたします。

○教育委員（大森志保君） 鉢盛中学校2年生の保護者の大森です。お願いします。

○事務局次長（小林伸一君） 湯本校長先生が少し遅れて見えられるということですので、よろしくお願いいたします。

それから、ここで本日の会議のオブザーバーとしてご出席いただいております牧野教授をご紹介申し上げます。

牧野教授は、愛知県名古屋大学大学院教育学研究科博士課程を修了いたしまして、名古屋

大学大学院教育研究科助教授、同大学院教育発達科学研究科教授を経まして、2007年から東京大学大学院教育学研究科教授に就任され、現在は東京大学高齢社会総合研究機構副機構長を併任されている方でございます。

先生は、社会教育や生涯学習などがご専門で、自治体と一緒にになって公民館や生涯学習の協働調査、多世代交流型コミュニティの構築などについて研究を進められております。

後ほどご講話をいただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これより議事に入りたいと思います。

議事の進行につきましては、菅谷管理者ですので、よろしくお願いいたします。

○管理者（菅谷 昭君） それでは、座ったままで失礼しますが、このまま議事を進めます。

本日の懇談項目は、先ほど申し上げました信州型コミュニティスクール鉢盛モデルについてでございます。

意見交換に当たり、まず初めに、お2人の先生からお話をいただきたいと思います。牧野先生にはこの後お願いしたいと思いますけれども、それでは、初めに、鉢盛中学校コミュニティスクールの状況につきまして、湯本校長先生からご紹介をお願いいたします。

○学校長（湯本武司君） 皆さん、こんにちは。鉢盛中学校長の湯本と申します。遅れてしまい大変申しわけございません。

本校のコミュニティスクールで取り組んでいることや課題等をお話ししたいと思っております。

まず、コミュニティスクールを進めていく上での課題と、今私が抱えている悩みであります。

まず1点目、先進的にコミュニティスクールに取り組んできたと言われる学校長とよく話すのですが、現在、ボランティアを確保できずに困っているという悩みをよく聞きます。ボランティアに頼っていく活動ばかりでは長続きしないと思われれます。また、我々校長は、ボランティアの登録数をとても気にするのですが、多いからいいというものではないのだと感じております。

2点目ですが、地域との交流を頻繁にやっている学校は、先生方に負担感があるということ聞きます。特にいま、教員の働き方改革と言われておりますが、教員の多忙化が進む中、新しいことを伝統的に続けていくことになると、教員には負担感しか残っていかないというような話をよく聞きます。ですから、地域との交流というのは、お互い無理のない関係、お互いにノーと言える関係づくりが大切ではないかと感じております。

来年度、鉢盛中学校にコミュニティスクールの統括コーディネーターを置いてくださることになり、我々は大変感謝しております。具体的な業務は、検討中ですが、現在やっていただきたいと考えている業務であります。

まず1点目、山形村教育委員会、朝日村教育委員会、今井公民館へ、統括コーディネーターが1週間に1回は顔を出し、地域の要望や学校ができること等の話をすることが大切では

ないかと考えております。

2点目は、現在教頭がやっているコミュニティスクールに係る業務や校務の手伝いをしていただきたいと考えております。あくまでもコーディネーターがいろいろ企画運営するのではなくて、我々とコーディネーターが話しながら、コーディネーターには学校と地域の活動をコーディネートしていただきたいと考えております。

本校では、今井地区、山形地区の農家の方の協力を得て、りんごの摘果作業をやっております。5月半ばに毎年やっていますが、時給270円、1日6時間で日給1,620円です。2、3年生がやっております。この写真のように休憩時間には地域の方と一緒にパンを食べ、また、生徒の中には地域の方と摘果作業をやる子もいます。昭和60年より30年以上続いている活動です。

このりんご摘果作業の収益が役立っております。生徒には学校図書として還元されています。本校には図書館に生徒が行くなと思っております。本校の図書館は、りんご摘果作業で充実しており、昨年度は1人当たり30冊くらい借りに来るような図書館であります。りんご摘果作業のお金で新刊本が毎年150冊から200冊くらい入ってくるということも図書館を利用する生徒が多い大きな理由だと思います。私の中学校時代には、お恥ずかしい話ながら、学校の図書館は1年間に1回行くかどうかというくらいだったのですが、鉢盛の子たちはよく利用しているなど感じております。

コミュニティスクール運営委員会は、今年既に2回開いたのですが、この写真のような形で開きました。ただ会議を開くだけではなくて、ぜひ生徒の姿を見てほしいということで、授業参観も必ず取り入れてやっております。

このコミュニティスクール運営委員会の後、2学期始業式の校長講話で生徒に話した話の要約であります。

コミュニティスクール運営委員会のとき、朝日村の清水様という方が、しきりに敷地内の木のことを気にされておられました。校長先生、鉢盛中の木は何とかならないかな、腐りかけているものもあるので、あれでは危ないよと話しかけてきました。鉢盛中は大変自然に恵まれているので、木もたくさんあります。私は危ないことはわかっていたのですが、木は1本切るのに20万から30万としますので木を切るお金がないのですと伝えました。すると、清水さんは、学校にお金がないことはよく知っている、俺がプロの友達を4人集めてくるで、夏休みに切りましょうと提案されました。清水さんは、校長先生、俺はお金なんかどうでもいいんだよ、来年、孫がこの学校に入学してくるで、その学校のために何か俺が貢献できればいいんだよと言われ、夏休み中に危険木の剪定・伐採が実現いたしました。2日間やっていただきました。木を切る前には、お神酒と塩と酒でお祓いをしました。これは玄関前にあった大きなヒマラヤスギが倒れるところであります。このように切っていただきました。

これは、駐車場にあった白樺ですが、これは中が完全に空洞になっておりました。この桜の木も上のほうが枯れておりました。この木は校舎の3階より高く、高く伸びすぎて危な

いと言われている木でした。このような形で、清水様を中心に6名の方が参加してくださいました。

また、長年の懸案だった桜並木も、高所作業車を組合教育委員会に借りていただき、整備できました。ここは桜並木で綺麗なのですが、整備していないもので、たくさんの枝が歩道にはみ出していました。去年の台風のときには、折れた枝などを片づけるのにお金がかかりました。この歩道にはみ出した枝をこのように高所作業車を使って片づけていただきました。この片づけには、松本市教育委員会にも大変お世話になりました。

木の剪定をしてくださった方々とお話ししていると、近藤様には本校にお孫さんが通っているということがわかりました。近藤様は、孫がお世話になっているので、私のやったことが学校のためになれば嬉しいです。と、清水さんと同じようなことを言っていました。

また、下田様は、東日本大震災のときに放射能が心配で福島県から朝日村に移住し、現在お孫さんが朝日小2年生だそうです。校長先生にそんなに感謝してもらえれば、それだけで嬉しいです。孫もこの学校に来ますからと話されておりました。

生徒に伝えたかったものはここだったのですが、私は6名の地域の方々の姿、言葉に心から感動しました。私は校長なんて言われているけれども、この方々に比べれば何と小さい人間なのだろう、私には人のためという気持ちがあるだろうか、この方々のように、お金ではなく、周りの人の役に立つために行動をするということが大切なのだと教わりました。

皆さんが住んでいるこの鉢盛の地には、この方々のように、学校のため、孫のため、人の役に立つためというだけで、お金も考えずに必至に働いてくださる方がいます。皆さんは立派な先輩を持ち幸せですね。働くとは、周りの人を楽にする、その意味を実感した夏休みでしたと地域の方々が作業をやってくださったのを校長講話で生徒にお話ししました。

また、剪定枝の片づけにつきましては、松本市の各学校の施設管理の皆様方に大変ご尽力いただいて学校が綺麗になりました。心から感謝したいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

以上で鉢盛中の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○管理者（菅谷 昭君） 校長先生、ありがとうございました。

それでは、続きまして、牧野先生から、コミュニティスクールや地域学校協働活動などにつきまして、先進的な事例や取り組みなどのお話をお願いいたします。

○東京大学大学院教授（牧野 篤君） 東大の牧野と申します。よろしくお願いいたします。

今日こちらでコミュニティスクールの事例を紹介してほしいというご依頼がありまして、実は、私は中教審の委員をやっておりまして、そちらのほうでこのコミュニティスクールや地域学校協働活動についての方向性をまとめた者の一人ですので、そういうことも少し含めましてお話をさせていただきたいと思っております。

最初に、今、新しい学習指導要領に切りかえが始まっていますが、その学力観が一体どのようなものかといいますと、学校教育の中で今までやってきたカリキュラムは学校の中だけ

では完結をしないということを、2年前の夏にいわゆる日本の教育行政の本丸である教育課程を扱っているところが宣言したということなのです。それを受けて、社会に開かれた教育課程をつくるべきだということになりました。

その背景は何かといいますと、実は、日本の子どもたちの知識の構造といいますか、知識に偏った能力の構造になっていまして、それが新しい社会にそぐわないのではないかという議論になったということです。その意味では、判断力や思考力、表現力、さらには協調性といったものが必要になってくるだろう。それで、基本的な知識の構造をこういうふうに捉え返したということなのです。

1つは、どのように社会、世界と関りながら自分の人生を歩んでいくのかということです。今までは人生70年くらいで社会設計がなされていたのですが、今はもう人生100年で設計しなければいけません。例えば、今の小学校5年生は、平均寿命は107歳と言われているわけです。その意味では、もう学校の中だけの知識で一生を過ごすことは無理だということなので、その意味では、どうやって社会に関わっていくのか、自分でどう人生をつくるのかといったことが問われています。さらに、そのベースとなるものとして何を知っているのかということと、それを使って何ができるようになるのかということが、これから大事になるだろうということなのです。その意味で、確かな学力と健やかな体と豊かな心と、合わせて、他者と一緒になって生きていく力を、これから身につけていく必要があるだろうという議論になりました。

これは少しわかりにくい絵ですが、それを実現する学び方と、それから教え方としてアクティブ・ラーニングというふうに言っています。直訳すれば、活動的な学習ですとか、学びということになりますが、それはもう少し意識をしまして、主体的で、対話的な深い学びというふうに訳しております。この一番重要なところは、対話的であるということなのです。今までは、一人で勉強し、また、人と競争して勝っていくという力が求められてきたわけですが、これからは対話を通して、一緒になって学んで、一緒になって深めていくといったことが大事になるでしょう。その意味で、新しい学習指導要領のキーワードは、今までは教科間や学校段階間で分かれていた知識の構造をつなげていく必要があるでしょう。

それから、実は新しい学習指導要領では、学校の中ではとても賄いきれないくらいの量も質も求められています。主体的で深い学びといったことと、さらには、多様性や多元性ですとか、寛容や受容といったことが求められてくるでしょう。ここにありますように、他者と一緒になって学びをつくり、知識や探究心、新しい価値をつくり出していく、単に過去の知識を覚えていくだけではなくて、また新しい知識をつくり出していく力がこれからは求められるということになります。

大きな動きの方向性としては、アクティブ・ラーニングによって学校に伝わっている知識を受けるだけではなくて、自分たちで探求していき、さらに地域学校協働という形で地域と学校とが連携を取る中で新しい知識や価値をつくり出していく活動をしていきます。さ

らに、それを支えるためにチーム学校というものをつくって、地域の専門家の方々にも学校に入っただきながら、学校経営を進めていきます。それが合わさったものをコミュニティスクールとしてやっていきましょうという議論になっています。

社会的な背景としましては次のようなこともあります。例えば、日本でゆとり教育の見直しのきっかけになったPISAというOECDがやっているテストがありますが、実はもう、人と競争して勝ち抜く力なんていうことは全く言われなくなりました。簡単に言いますと、協働して問題を解決する力がこれから求められるということになっています。来年になりますと、いわゆる地域構造のコンピテンシーというのが出てくるわけですが、今は検討中なのですが、漏れ聞こえてくるところによりますと、一緒になってやれる力、協働する力やコミュニケーション能力が重視されてくると言われています。

その意味では、世界全体も今、競争から協働の時代に入ってきているということと、それから、多元化や多様性、さらには一人の強いリーダーが引っ張っていく社会から、全員が参画をしながら、みんなで価値をつくり出す時代に入ることが言われているわけです。

国内はどうかといいますと、学力と心と体といった学力の3要素を合わせて生きる力と言ってきたものをもう少し強化していこうということになっています。ただ、幾つか日本の子どもに課題があることがわかっていまして、1つは論理展開能力が弱いんです。人と意見が違ってしまうとけんかになってしまう、またはディベートになって潰し合ってしまうようです。お互いが理解し合いながら、新しいものをつくり出すところが弱いのではないかという指摘があります。

それから、もう一つは、これも論理と関わってくるものですが、理科や数学の実験結果を自分で論理上げて説明することがとても苦手であるという結果が出てきています。さらに、自己肯定感も低い、逆に言えば、自分をきっちりと人に説明して、理解してもらえんという力を持っていないので、どうも自分に対する肯定感が低いようです。さらには、社会に参加しても、どうせこの社会は変わらないと思っているようで、もう少し積極性を持ってほしいという思いがあったということです。

そのような中で、コミュニティスクールといったものをつくれないう議論になりました。もう2年前の冬になりますが、3つの方針が中教審から出されました。左側から、教員資質向上答申というものと、真ん中はチーム学校答申、一番右側が地域学校協働答申というものになります。

一番左側は、学校の先生方に、いわゆる学校の中だけで知識を伝えるという役割ではなくて、むしろ子どもと一緒に知知識を探究し、新しい価値をつくり出せるような力をつけていただきたいというので、いわゆる教員養成課程を変えるということなのです。さらには、研修のあり方も変えていくということで、実は、教職免許法も変わってしまっていて、実は私たちも大学の中で、カリキュラムの組みかえで今ばたばたしているのですが、もう法的にはその方向性で動いています。先生方が、要はアクティブ・ラーニングを使って、教育ができる

専門職として学校の中で活躍をしていただきたいということです。

2つ目のチーム学校については、いま学校はさまざまな問題を抱え込み過ぎているのではないかと、多くの教育長さんたちが、実はもう2030年まで、今の状況でいくと学校はもたなくなるよということの警告を発しています。その意味では、先生方が教育の専門家としてきちりと役割を果たせるように、さまざまなところを地域で担当できないかと、例えば、今、子どもたちは福祉問題をいろいろ抱えていて、朝ご飯を食べてこなかったり、貧困問題があったりするわけです。そうしたところも今は先生方が対応されているのですが、そこを例えばスクールソーシャルワーカーを入れて、福祉の専門家にかかわってもらえないかですとか、ちょっと議論がありますが、例えば、部活の指導員なんかも、地域の方々が担えれば担ったほうがいいのではないかですとか、さまざまな議論が出ています。その意味では、校長先生がリーダーシップをとりながら、先生方がきちりと専門職としての役割を果たせるようにしていくというのが真ん中のチーム学校という答申なのです。

そして、それらをまとめる形で一番右側の地域学校協働答申といったものが出ています。これはコミュニティスクールに関わるものですが、単に学校運営協議会をつくって、学校の経営に地域がかかわっていくということではなくて、例えば、人事権にも、人事の発言権があるという議論があって、学校は警戒されたのですが、実は、コミュニティスクールの心といいますか、趣旨は逆でして、人事に口出しするのであれば地域がきちりと責任を負ってくださいねということなのです。ですから、学校の経営そのものにも地域がかかわっていくというのは、逆に言えば責任を負ってください、何でもかんでも学校に任せるのではなくて、子どもたちの教育は地域で担いますよ、一緒にやりましょうという関係をつくっていただけないかということが出てきたのが、この答申です。

そして、それをやる措置として考えられましたのが、例えば、地域学校協働本部のようなものをつくって、学校を支援するだけではなくて、学校と一緒に子どもを育てていくというものです。先ほどの木を切っていただいた事例がありましたが、学校の整備も学校に任せるのではなくて、地域住民と一緒にやろうという関係になっていき、さらに、りんごの摘果作業のお話もありましたが、そこで子どもたちがいろんなことを学んでいくはずなのです。そのようなことを地域で担っていけるような関係をつくれませんかという議論になりました。

実は、答申が出た後、関係法令が法改正になっておりまして、コミュニティスクールも任務ですが、実習していただきたいということになっております。また、協働本部もつくっていただきたいということになっています。それらを受けて、ここにありますように法律が変わったということなのです。

そして、さらにあと3年経ちますと、実は大きな改革が待っています。デジタル教材が入ってきますので、子どもたちは、この中で勉強ができてしまうので、単に知識を伝え合うだけではだめだろうということです。さらには、センター試験が廃止になるなど論理思考力が

求められています。

ここで、実は大きな問題が起こるだろうという指摘があります。1つは、さまざまな社会体験を積めるような条件を持った家庭の子たちですとか、または東京にいる子たちのほうが有利ではないかということです。喫緊な例で申し上げますと、既に私たちのところに民間教育事業者と言われている大手の塾や私学から、このような打診があります。午前中はうちでしっかりと教育をします、午後は東京のさまざまな文化資源を使って、本物に触れる教育をします、長期休暇はアメリカに2カ月、東南アジアに2カ月とか、そういう社会体験をさせて、さまざまな形で子どもたちの能力を伸ばしていきます。年間500万円ぐらいでプログラムを組んでももらえませんかという要求があります。お断りしていますが、そのような500万円も払える家庭はあるのですかと問うと、年収3,000万円から4,000万円の家庭で十分引きがありますと言うのです。それは大変ですねという話になるのですが。

そういう形で、ある意味では、文化資源といいますか、家庭にお金があって、文化資源を持ったところが有利だという議論が当然あるのです。それに対して、地域資源を生かした形で各地のあり方というものはないのだろうか。東京にないものは何であろうか。例えば、松本市が持っているさまざまな公民館ですとか、または地域の人間関係ですとか、そうしたものはもう東京にはないのです。その意味では、そこで子どもたちが地域の大人に受け入れられて学んでいき、まちの主役になり、まちを運営していくという経験を積んだ子たちが出てくるのではないのでしょうか。

例えば、慶応大学の湘南校舎は、そういういわゆる経営マインドを持った子たちを欲しがっているわけです。そういうことをやっている地域からいま優先的に子どもを入れたりしています。そういう意味では、地域がしっかり子どもを教育していくことによって、いわゆる家庭の文化資源ですとか、経済力とかは関係なく地域の子どもたちを育てることが可能になるのではないかという議論が出ています。

何が問題なのかというのは、簡単に言えば、従来のような社会ではなくなっていることです。今までの社会は、家族があるとする、社会は会社に入ること、国が全部面倒をしてくれますよという感覚でいられたと思うのです。二、三十年前の社会です。例えば、私の両親の世代はそういう感覚で、私もそのころ生まれていますから、何となくまだ淡い期待を思っているのですが、簡単に言えば、社会保障が企業と家族を担っていた時期があるわけですね。それに対して、家族から子どもたちを企業に入れていく役割を持ったのが学校であったということです。私もよく親から、一生懸命勉強して、いい学校に入って、いい大学に入って、いい企業に入れば将来は安泰だと言われ続けてきたわけですが、今それはもう壊れています。家族から企業へ、学校が人材の橋渡しをしていくということも難しくなっていますし、企業そのものがそのような役割を果たせなくなっている、社会を安定させる役割を果たせなくなっているのだろうということです。そのような中で、個人が大事になってくるわけです。その意味で、お互いが協働し合いながら新しい価値をつくり出していくとい

うことをしなければいけないでしょうし、その背景として、少子高齢化や人口減少の話があるわけですね。

そして、人生すごろくが変わってきていて、100年時代を考えなければいけなくなっていることに加えて、なかなか目には見えませんが、実は日本は、OECD諸国の中で最悪レベルの貧困状態と言われているのです。そうした子どもの貧困についても解決しなければいけないでしょうということなのです。いま、人々が孤立をしてしまっていて、いわゆる社会というものが解体する時代に入ったので、もう一度新しい社会を構想し直さなければいけなくなっています。そういう重い課題を私たちは担ってしまったのだらうということなのです。先ほど申し上げましたように、その意味では、競争するのではなくて、協働しながら新しい社会をつくり、子どもを含めた全ての人々がフルメンバーになっていけるような社会をつくる必要があるのだらうということになりました。

そこで、大きなテーマといたしましては、今まではナショナルをベースに考えてきたのですが、ソーシャルであることです。国をどうするのか、国はどうあるべきなのか、企業はどうかという議論をしてきたのですが、少し自分と家族と地域社会ですとか、自分と家族とコミュニティですとか、そのような形で視野を広げていながら、社会基盤をつくっていくといったことが必要になるのだらうということなのです。

国は、ずっと左側のようなことを言ってきたのですが、実は、小さなコミュニティに着目し始めています。総務省の官僚は、地域経営組織という形でもう1回建て直すために、小学校区レベルの地域を重視し始めて、このような新しい組織をつくろうとしています。先日も、ブレンたちと話をしましたら、全国で調べてみたところ、組織づくりがうまくいっているところがあるそうです。例えば、長野県ですと飯田市ですとか、また、松本市も一つ例に挙げがっていました。どこかと聞きましたら、公民館がしっかりしているところとおっしゃるのです。公民館がしっかりしていると、住民の方々は自分たちで地域を治めることに慣れていらっしゃるの、こういうことを持っていても動いてもらえる、また、こういうことを持っていかなくても既に動いているというのです。

それから、厚生労働省が地域包括ケアシステムを動かそうとしています。これからの高齢社会に対応しようとしているのですが、なかなかうまくいかないようです。これも厚生労働省が調べたところ、公民館がしっかりしているところは非常にうまくいっているところが多いということでした。

さらに、いま国土交通省は、地域防災ということを盛んに言っています。私も町内会長をやったことがありますので、防災訓練をやると、大体2回ぐらいで皆さん疲れてしまって出てこなくなってしまうのですが、うまく動いているところがあるのです。これも公民館がしっかりしているところだと国土交通省が言っておりまして、その意味では、公民館や小学校区単位の小さなコミュニティを政策のターゲットにしようという動きが強くなってきています。

これからは、市町村、さらに下のレベルがターゲットになる時代に入ってきたということです。それはコミュニティが新しい価値をつくっていく時代に入ってくるということです。

さらに、次のようなこともわかっていまして、若者が移動をしているのですけれども、それは右側にありますように、地域社会を重視して移動しているということがわかっています。しかも、彼らは仕事があるかないかということより、受け入れてもらえて、ちゃんと自分が役割を果たせるかどうかで地域を選んでいるという傾向が強くなっていることがわかっています。彼らは、ネット世代なものですから、パソコン1台あってネットにつながれば、自分たちでその場で仕事をつくれると思っていて、既存の仕事があるかないかは余り関係がないこともわかってきています。その意味では、そのような社会をつくっていく必要があります、そこで問われてくるものは何かといいますと、実は対話をしていく中で学んでいくという関係をどのようにつくれるかということなのです。

実はいま、創造性といったものが議論になっていまして、個人が創造するのではなく、社会関係があるものを創造していくことになっています。それに敏感に反応した人が、社会関係の中にあるものを取り出して自分が創造したものと言っているにすぎないのではないかと思います。その意味では、豊かな人間関係がないと、実は創造力も失われていくのだろうと議論になっています。

知識を得ていくことも、実は個人だけで頑張るだけではなくて、むしろ自分たちが新しい世界をつくり出していくという運動の中にあるということなのです。つくり出して運動を続けていく私たちそのものが実は学びという存在になっていくのではないかと思います。その意味では、学びの本質とは、自分の世界を人と一緒になってつくり出していく喜びやわくわく感といったものを見つけていくこと、そして、その過程で自分がどんどん新しくなっていくという喜びに満たされていくということが基本になるのではないのでしょうか。つまり、競争して人を蹴落とすのではなくて、一緒になって新しい自分をつくり出していくということがこれからの基本ということなのです。

対話的な関係の中で新しい価値をつくり出すことのベースは何かといいますと、従来のように、例えば住民が行政に依存していくような自治のあり方よりは、自分たちで活動しながら新しい地域をつくっていきますよ、自分たちでやりますからやらせてくださいと言ってくることで創造性というものになり、それがベースになる社会をつくっていくことになるのではないのでしょうか。言い方を変えれば、ある意味では人々の間に信頼感をつくっていくことになるのです。

どんなことが例としてあるかといいますと、1つは、これはコミュニティスクールではないのですが、多世代交流型のまちづくりという形で動いているところがあります。これは千葉県の柏市の高柳という地域のことで、ここは今、小学校、中学校、高校、特別支援学校と地域の住民の方々が連携して、さまざまな活動をしています。私たちが関わった事例ですと、高齢化している地域なのですが、たまごプロジェクトと言われているもので、自分

たちがケアされるのではなくて、自分たちが子どもを育てまじょうと、他人の孫も自分の孫にして、孫を増やまじょうという議論を始めたところから新しいまちづくりを展開しているのです。

省略いたしますが、私たちのほうから、地域の方々がまちのコーディネーターになれるように、まちの長老セミナーという形で、2年間30コースぐらいでプログラムを組んで、地域の方々に受講をしていただきました。住民の約1割の方が受講されて、自分たちで地域を経営する力をつけてもらいました。さらに、キャラクター発表会では、子どもたちにも関わってもらって、まちのキャラクターをつくってもらいました。さらに、多世代交流セミナーという形で、人間関係を少しさばき直すということをしてしながら、コミュニティ関係をつくりまじょうという議論になりましたので、まちから車庫を提供していただいて、住民総出で内装を変えて、キャラクターも書いて、5年ほど前にオープニングになったのです。中はこのような形で使われていまして、地域の方々が、1日に今120名ぐらいの方が集まっては、さまざまな使われ方をしています。外もこのような形で交流の拠点になっていまして、子どもたちも使ってくれているのです。交流が活発化してきていまして、どんなことになっているかといいますと、日常的には、朝、子どもたちがここに、おはようと言って学校に行くのです。向こうの方々は辻立ちをされています、交通安全のおじいちゃん、おばあちゃんにおはようと言って声かけながら行くようです。また、皆さん校門で待っていらっしやって、そこでおはようと挨拶をして、手をつないで学校の中に入っていって、朝の読書指導を先生と一緒にやるのです。

それから、学校の先生方からは、授業は一斉でやっているのですが、わからない子がいるので個別指導に関わってほしいと要求があります。また、本来、先生方は給食の時間は休み時間なのですが、子どもたちに何か事故があってはいけないので、給食指導をしています。地域の方々が子どもをちゃんと見ているから大丈夫だよと言って、自分も給食を食べながら子どもを見てくれていて、そこには、例えば地域の野菜の話などをしてくれるわけです。また、掃除も一緒にやって、帰りは帰りで子どもたちはここに一遍たまいと帰ってきて、それでお菓子ないのとねだって、さらに宿題を見てもらいながら、学童保育のように使っているようです。さらには、高校にも入り込んでいて、高校で人生の先輩から話を聞くというプログラムをやっていたり、さらに、生活科や総合的な学習の時間で地域探訪探検という授業をやっていたりするのですが、それで先生方は地域の人ではないのでわからないことがあるのですが、このコミュニティカフェに投げてくださいと、地域みんなで、こういうことがあるからこれやってあげられるよ、例えば、農家に行きたいと言えば、農家を紹介するからというようなことをずっとやられているのです。

それから、先日は地域の方が学校の遠足に同行したということでした。何人行ったのかと聞きましたら、40人も同行したそうで、子どもは70だったというわけです。学校には迷惑がられたでしょうと言ったら、喜ばれたと言うので、本当かどうか学校に確認に行ったの

です。そうしましたら、先生方は助かったとおっしゃっていたのです。私も知らなかったのですが、遠足は先生方にとっては苦行だということです。1人で30人も40人も引率していると、事故があってはいけないのでトイレも行けない。それで、前日はお茶を飲むことを控えているとおっしゃっていたのです。それで、今回40人も同行してくださって、子ども2人に1人ぐらいついてくださったので、ちょっとお願いしますといっているいろんなことができて、トイレも行けて、ご飯も食べられて、本当助かりましたと言われていて、そういう関係ができ上がっているのです。

そういうことの中で、例えば、子どもがクッキーを焼いているのですが、そのクッキーもこのコミュニティカフェで売っていて、とてもおいしいというのですごく売れちゃうようです。先日は、校長先生が来られて、もう勘弁してほしい、もうこれ以上つくれませんというふうに言ってきたようで、そういう形で、もう地域全体と子どもたち、学校が交流をしていくような形ができ上がっているのです。

そういうことの中で、子どもたちに優しい地域だという評判が立って、今この地域だけは学級増になってるようです。それから、本来は文化史的にはわかっている話なのですが、最近では遠足を自分たちでやり始めて、文化の伝承を高齢者から子どもへされているようです。いま学校は、バスでの遠足はありますけれども、危ないからということで歩行遠足をやらなくなってきているそうです。それで、地域がこれからやるということで、先生と親はついてくるなとなっただけです。初年度は、子ども6人に高齢者が20人ついていったのです。最初は子どもたちに嫌がられたかと思ったそうですが、きちんと地域のことを教えて、野花や草のいろいろな話をしながら回ったら、2年目には子どもが60人参加したということです。3年目となる今年は160人集まったようで、親からもどんどん信頼が高まってきて、学校からもあれこれやってくださいとお願いが来ると、それが嬉しくて、また一緒にやってしまうという関係ができ上がっています。

それからもう1つは、私も関わっている愛知県豊田市のコミュニティスクールについてです。一般的な理解では、コミュニティスクールは学校運営協議会を持っているということですが、豊田市にはこれがないのです。さらに、PTAも置いていなくて、PTCAという形で地域が入っています。学校運営協議会を地域学校共働本部と彼らは呼んでいて、共働本部の共という字は国が使っている漢字とは違うのです。共働き本部なのです。協力し合う協ではなく、共に働く本部になっていまして、そのようなものを置いています。

例えば、この浄水中学校というモデル校があるのですが、中学校1校と小学校2校で中学校区のコミュニティスクールを組んでいまして、各学校にPTCAが置かれているのです。学校にPTCAの部屋があって、住民が自由に出入りをして、そこでお茶を飲んだり、いろんな会話をしたりできるようになっています。

真ん中にこのコミュニティスクール連絡会議というものがつくられていまして、ここが各学校の経営に関わることになっています。学校が何かあると、例えば、校長先生が、今度こ

のようなことをやりたいのだけれどとこの部屋に投げると、そこから回覧板などを使いながら、今度学校がこのようなことをやりますが誰か手伝いませんかと地域住民に情報が回るようになっているのです。そうすると、地域住民ができるよと言ってきて、動いていってしまうというつくられ方になっています。PTAもありませんので、PTAの役員が何か回ってくるとか、そんなこともないのです。そういうことの中で、こういう形で、国がつくったものを少し彼らはアレンジして使っているのですが、地域のいろんな方々がこの共働本部を通して学校にかかわるという関係ができ上がってきているのです。

校長のお話を聞きますと、地域の方々が、子どもたちを自分事として捉えてくれるようになったとのことでした。例えば、今までは部活がうるさいとか、運動会の準備で放送がうるさいとか苦情が来たようですが、これが始まると、みんないいよいいよと言ってきて、どんどん何かあれこれやってくれるようになり、苦情がなくなったとのことでした。それから、住民がさまざまな形で関わってくれていて、学校に自分の子どもがいようがいまいが学校のために何かやってくれるようになったそうです。しかも、自分から学校に来ているので、やらされているという感覚がなくなっているのです。それでまた、学校に感謝されたり、子どもたちからありがたうと言われたりすると、嬉しくなって、先ほどの鉢盛中学校の木を切ってくださった地域の方々と同じようなことになっていくわけです。そういうことの中で、子どもや地域住民、また教師と地域住民が近くなったとおっしゃってしまして、豊田市はこれを市内の全ての学校に広げようとしています。

それには、私はこれをドットと呼んでいます、住民がさまざまな小さなコミュニティ、連携したネットワークを組んでいくということで、ドットがいっぱいあることによって、さまざまな人々が、さまざまに動いていくという社会をつくっているのではないかということなのです。そして、その方々が自由に動き回ることによって、学校が安定し、社会も安定していくのではないかと思います。そういうことの中で、例えば、先ほどの柏市の事例なのですが、自分たちで防災などの団体をつくってしまうのです。このケアラズカフェというのは、いわゆる地域包括ケアの支え合い会議に相当するものですが、これも市が何も言わなくても、住民が自分たちでつくっていて、包括ケアの仕組みがあるということになっています。

その意味では、コミュニティスクールをベースに公民館などを使いながら、地域の方々が学んでいく楽しさを見つけることによって、いま、社会が抱えているさまざまな課題をある程度解決する方向に動くのではないかと思います。

もうそろそろ終わりにしたいと思いますが、簡単に言いますと、言葉を覚えていく、知識を覚えていくということとともに、やはり体を使って、地域の人がちゃんと生きているのだという気持ちが持つような教育のあり方がこれから問われてくるだろう。その意味では、マンネリ化した学校の中だけではもう完結しなくなっている、人々と結びついていながら、新しい社会をつくっていくということを体験していく必要があるということなのです。

今後は、コミュニティスクールを基本にしながら、地域のすべての人々が活躍できる地域社会をつくっていくことが求められていて、やはりコミュニティスクールというのは、子どもたちのためにあるだけではなくて、地域が子どもの教育を引き受けることによって、地域そのものが自分たちの地域を牽引していくという方向性を変えることを国としては考えているのです。

子どものあり方としては、左側にたくさん書きましたが、言葉でしっかり議論しながら、異なる意見を受け入れながら新しい価値をつくり出していくといったことと同時に、それを支える人間関係をつくっていくことが大事になるでしょう。その意味では、学習指導要領にある確かな学力と健やかな身体と豊かな心をベースに、言語と体験といったものがこれから求められて、それをベースに他人と一緒に生きていく力をつけていく社会を次の社会に受け渡していくことになるのです。

今、いろいろなことに見える化と言われていて、わかりやすさが求められています。学校では、そこに行くのではなくて、言語を大事にする必要があるでしょう。簡単に言いますと、見える化は、私たちの認知能力を二次元、三次元に下げますので、わかりやすいのです。その私たちの言語というのは、今私もしゃべっていますが、ここら辺であれこれ考えてしゃべっているわけです。皆さんの顔を見ながら、反応を見ながら、何を言おうかと考えながら、そういう意味では、高次の認知能力は言語を使うことによって出てくるわけで、私たちは高次の認知をしているはずなのです。それでも、見える化をしてしまうと、認知が下がってしまおうという議論が今出ている、言葉に溺れると、私たちがよく言う頭悪い東大生がいっぱいいるのですが、言葉で全てを解決、人を判断するという東大生が多いのですが、正しく間違えるのです。彼らは、間違えるべくして間違えます。なぜかと言いますと、体がこっちはおかしいよと言ってくれないからです。条件というのは先に初期設定されていますから、論理だけで突き進んでしまうと、そのとおりにしか行かないのです。本来であれば、初期設定がおかしいと思わなければいけないのに、思えなくなっているというのが頭悪い東大生なのです。その意味では、体験をして積んでいきながら、初期設定がおかしくないと言える認知のあり方をつくらなければいけないだろうということなのです。

最後に、社会に信頼をつくっていくというお話をします。長箸の寓話をご存じかと思います。仏教のお話かと思っていましたが、先日キリスト教徒の友達からキリスト教にもあるよと言われました。地獄と天国の話です。地獄には、ごちそうがたくさん準備されていて、長い箸が用意されているのです。長い箸を使って食べなければいけない。天国でも、ごちそうがたくさん準備されていて、同じように長い箸が準備されているのですが、地獄の人々は飢えて争っていて、一方で天国の人々はお腹いっぱいになって、みんな幸せそうに暮らしています。どこが違うのかというと、実は、その箸は長過ぎて自分の口に入らないのです。地獄の人々は、他人のことが信用できないので自分で食べようとして、口に入らないので飢えて争っているのです。天国の人々は、他人を信用しているので、お互い食べさせてあげている

からお腹いっぱいになるのだという話です。

実は、日本の社会は、天国のように条件が全部揃っているいい社会であるのに、信用できない、そこで自分でご飯を食べようと思って、ある意味で争ってお腹が空いてしまっているのではないのでしょうか。このままではなくて、新しい人間関係をつくっていきながら、お互いを信用できるようになれば、もしかしたら、先ほど木を切ってくださった地域住民のように、例えば、私がAさんだとすれば、Bさん、Cさん、Dさんを伴って自分に返ってくるかもしれないと思えば、人は何かするのではないかということなのです。

その意味では、これもわかっている話なのですが、利己的であることは利他的である、自分のことを考えれば、他人によくしてあげなければいけないと思えてくるようになります。それは、人は自分にとって何が利益かわからないときには、一番弱い人のために何かしようとするということがわかっているのです。それぐらい人間というのは、実は社会的な動物なのですが、そのあたりが何となく切断されてしまっているのではないのでしょうか。もう一度子どもたちを地域で育てることによって、この先代から受け継いだ社会を次の世代に伝えていくといったこと必要があるのではないのでしょうか。その意味では、一番下にありますように、子どもたちのために一肌脱ごう、自分からやっているのだ、子どもからありがとうと言われなくても、自分が生きた社会が子どもに引き継がれていくという喜びを持とう、そういうことができるような社会をつくりませんかということになるのです。

自分がやったことが実現していく楽しさを生み出された社会をこれからつくっていくことによって、日本の社会のあり方がより創造的なものになっていくのではないかという議論が展開しているということなのです。

すみません、少し長くなりましたが、以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○管理者（菅谷 昭君） 牧野先生、ありがとうございました。

今、校長先生並びに牧野教授からお話をいただきました。先進的な事例やご助言などのお話を伺ったのですが、ここで意見交換に入りたいと思います。

鉢盛中学校のコミュニティスクールにつきまして、改めて各委員さんからご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは初めに、赤羽教育長からお願いいたします。

○教育長（赤羽郁夫君） それでは、今、湯本校長先生と牧野先生からお話をいただきましたが、お2人の話を聞きまして、私がまず率直に感じたことは、来年度から統括コーディネーターを配置して、コミュニティスクール鉢盛モデルを進めていくわけですが、やはり私たちは最初に何か新しいことをやるというときに、どうしても枠組みを先につくりたがるのです。枠組みを先につくってからスタートしようとしします。例えば、ボランティアは長続きしないとか、地域との交流は教員に負担感があるとかというお話も先ほどありましたが、私が県の教育指導主事という仕事をしているときに、生活科の指導主事をしていたことがあったので

すが、その発足当時も全く同じように、人材マップですとか、それから地域マップですとか、先に枠組みをしっかり準備して新たなもの取り掛かるにということをやりました。ところが、結果的にはうまくいかなかったのです。やはり取り組みながら常につくっていく、必要なときに必要なように折り合いをつけて地域の方々や保護者といったいろんな人たちとやっていく、そういうことが本当に必要だということを改めて感じました。

それと、牧野先生のお話をお聞きして、コミュニティスクール鉢盛モデルで、どういう生徒を育てていくかということと同時に、この3市村の地域づくりというところにどのように鉢盛モデルが貢献できるかという視点をきちんと教育委員会の中でも論議しながら進んできたのだと、今日は新たな視点をいただいたと率直に感じました。

以上です。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

それでは次に、根橋委員さん、お願いします。

○教育長職務代理者（根橋範男君） 湯本校長先生や牧野先生のお話を聞いていて、私も赤羽教育長と同じ考え方です。中学校が支援を受けるだけではなくて、それぞれの地域の中にコミュニティスクールとしてどう出かけていくのか、地域づくりに関わるか、生徒たちがどう地域の中で活動できるのかということがとても大事だと感じました。

支援をする方々は、学校や生徒たちからの感謝の気持ちで動いているときはいいのですが、なかなかそれだけでは動機づけにならないときが来ると思います。そのときは、生徒たちも地域づくりへの参加など、学校と地域が相互に良い関係で動くことが必要ではないかと感じました。

以上でございます。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

それでは、二茅委員さん、お願いします。

○教育委員（二茅芳郎君） 牧野教授のお話にも地域と子どもたちのコミュニケーションのお話がありましたように、今年の朝日村での特徴的な試みとして、地域サロンというものが各地区にあり、そこのおじいちゃん、おばあちゃんが、学校へ来て学校や子どもたちと関わっています。5年生がおやきの焼き方や漬け物の漬け方を教わって、村の文化祭でカフェを出すなどしました。私はおやきを食べたかったのですが、あっという間になくなってしまいました。漬け物もおいしくて、その漬け方を教わったと聞いて、これはすごいなと思ったのです。それは、やはり先生の負担感というのはあくまでも感ですので、気持ちは非常によくわかりますが、子どもがどういう成長をしていくのかというのを見ながら、どうやって地域と関われるのかということを考えていかなければいけないと感じました。

以上です。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

では次に、平林委員さん。

○教育委員（平林昌廣君） 私も、地元の小学校の裏に住んでいるものですから、小学校での学校支援に関わっています。牧野先生のお話と、自分の体験といったことを考えますと、いろいろ教えてもらったことがあります。それは学校の求めに対して、学校支援活動から入っていたのですが、そのような中で、地域ができることを、またできる人が、無理をせずという形で始めていたのです。それで、いま湯本校長先生からお話があったように、学校の先生方も地域もできないことはできないと言い合えるような関係ということを経験しながらやってきました。そのような中で、いま牧野先生のお話を聞きながら、学校の先生方の求めに応じて地域が支えていくときに、どちらかというと、学校生活をしている中で子どもたちへの支援、いわゆる授業への学習支援というところよりも、私は自分で勝手に学校支援からはみ出した形と言っているのですが、学校生活を離れた子どもたちの生活についても、家庭や地域が連携し、学校と情報交換しながら支えていかなければいけない機会が多くなっているように思いました。それが、そういうことで関わっていくことで子どもたちのたくましい力がついていくのかなというのが実感であります。

2つ目は、中学生の発達段階に合わせながら子どもたちがたくましい力をつけていくというようなときには、やはり子どもたちが学校での学びを返すというような形で地域へ出て行って、自立感や地方感情が大きく育つかなというのが実感としてあります。そのようなことで、鉢盛中の生徒の発達段階に合わせた支援の仕方というようなものを、小学校段階と違った形で工夫していく必要があるかなと私は感じています。

それから、3つ目は、これは組合立の学校の大きな悩みでもあり、うまくやれば利点だと思います。これからこういう学校が多くなってくると思うのですが、学校統廃合の問題もいろいろ絡まりながら、地域の中での小さい連携というのは案外やりやすいところがあるのです。行政組織が、1市2村にまたがるというような中で地域の情報交換や連携を深めていかなければいけないと思っています。

ほぼ湯本先生がおっしゃっていたことと重なりますが、いま私どもは村で取り組んでいる地域学校協働本部的な活動の中で悩んでいることとして、1つは、やはりボランティアの皆さんの高齢化の問題、したがって世代交代をどのようにしていくかということでもあります。それから2つ目は、学校の先生方とどのようにコミュニケーションを深めて、学校の先生方の願っている総意と、地域が願っている総意をうまく合体させていくのかと悩んでいます。

それから、学校支援というのは受け身的な取り組みからだけでなく、いわゆる学校支援的な発想からはみ出した形というようなものが熟議され、平成27年度から信州型コミュニティスクールに近いような形でのコミュニティスクール化を図っているわけです。課題を議論するところでは、こういう組織は非常にありがたいということで、いま学校の先生方と地域とで連携し合いながら議論をして進めているところですが、鉢盛中が地域包括的なコーディネーターを置いて、行政や地域との深い連携をつくってくれるというようなところで活躍していただけると、非常に先進的な取り組みができるのではと思っています。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

では次に、大森委員さん、お願いします。

○教育委員（大森志保君） 私は、こういうところで余り話をしたことがないので、的が外れていたら申しわけありませんが、エピソードを加えてお話ししたいと思います。

今井ではりんご農家が多いのですが、りんごをたくさん積み過ぎていたときに、道にりんごがこぼれていたことがあったのです。道路いっぱいりんごが散らばってしまったときに、皆さん嫌な顔をして、それを避けるようにして通っていたところに、ちょうど私も通りかかったので、子どもと一緒に拾ってあげたことがあったのですが、そうしたら、その方がたまたま同じ地区の方だったので、その何年後かに、うちの子がりんごを拾ってくれたというのを覚えていてくれたようで、私たちは非常に嬉しく思いました。そのことを子どもに伝えて、地域でりんごを拾ってくれたと喜んでくれているのを聞くと、私達も嬉しいんだよということを話したことがあって、そのときに、たまたま近くにガソリンスタンドがあって、あの拾ってくれたのは誰みたいなことで、うちのことがわかったという話を周りから聞いて、とても助かったと言っていたみたいだよと子どもに話して、もし親がいなくても、そういうことがあったらやってあげるといいよねと話をすることがありました。

また、この近所に独居のお年寄りの方がいるのですが、その人のところに近所の方が毎日ご飯を持って行ってあげているのです。それは頼まれたわけでもなく、自主的に持って行ってあげているようで、それはきっとその方が元気だったときに、周りの人にいろいろしてあげていたから、今は周りの人がやってくれているのだなと思っています。

また話は変わるのですが、鉢盛中学校でトイレぴかぴかデイという活動をされているのですが、うちの子どもたちは、家のトイレ掃除をしたことがなかったのですが、中学校でその活動に触れてからは、家でもトイレ掃除やるよと言ってくれるようになって、先ほどお話があったように生きる力も学んできているのだと思いました。

以上です。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

それぞれの委員さんからお話をいただいたわけですが、ここからはちょっと、牧野先生、あるいはまた湯本先生へのご質問などを含めて、しばらく委員さん同士で自由なご発言をお願いします。

○教育長（赤羽郁夫君） 私も常々感じているのですが、平林委員さんからもお話がありましたように、小学校段階でのコミュニティスクールのあり方と、中学校段階でのコミュニティスクールのあり方というのは、その子の発達段階が違いますので、中学生の発達段階での工夫が必要で、やはり学校での学びを地域に返すというような役立ち感のようなものが生徒を大きく成長させるのではないかと思います。また、根橋委員さんからは、地域で具体的にどのような活動ができるかという生徒の地域づくりへの参加についてのお話がありました。湯本先生、普段何かもし考えておられることはありますか。

○学校長（湯本武司君） 悩んでいることですが、いつも言われている地域に子どもを出した
いということは本当に大事なことと思うのですが、本校は大変部活動が盛んでして、休みの
日はほとんど部活動をやっています。また部活動に入っていない生徒も、社会体育でいろ
ろやっている生徒も大変多いです。新体操、体操、柔道、サッカー、野球、どの部活動の生
徒も土日の時間も部活動にとられていまして、地域に帰る暇がいつあるのだろうか悩んで
おります。また、先生たちは部活動をやらせてほしいと、子どもたちも部活動をやりたいと
言い、冬場でも、週2回6時半まで延長部活ということでやっています。夏場も6時半まで
やるのですが、地域に帰すという時間をどうとったらいいのだろうと、なかなか踏み切れず
にいるというのが私の悩みです。

○管理者（菅谷 昭君） その辺は牧野先生、こちらの地方都市のような場合はいかがでしょ
うか。

○東京大学大学院教授（牧野 篤君） いま全国的に同じような状況で、子どもはすごく忙し
いのですよ。スポーツだけではなくて、塾も忙しいですし、中学生が地域に帰すという議論
が違っているのかなと思います。

逆に言えば、帰すということよりは、学校と一緒に何かやるという議論をしたほう
がいいかなと思っています。柏市ですと、学校の弱みを探して、そこを手伝うんだとみんな
は言うのです。だから、弱みにつけ込むのではなくて、弱みを探して、そこに自分たちがで
きますよ、あれできますよといって一緒にやるのだとおっしゃるのですが、そういう関係が
できることがいいと思います。

ですから、平林先生が学校の本丸ではなくて、はみ出したところという話がありましたが、
いま先生の手が回らないところに地域の方が入ってもいいですし、出てもいいという形で引
き受けていくという関係をつくっていくことも考えられます。遠足についていくといったこ
とは先生方も大変でしょうが、給食の時間に一緒になって子どもを見るといったことなどは
できますし、そういうことがあると思います。

○管理者（菅谷 昭君） 二茅委員さん、何かございますでしょうか。

○教育委員（二茅芳郎君） 先ほどお話の中でありましたが、例えば、昨年、コミュニティス
クールが立ち上がりましたが、そのときに、ボランティアの方の部屋には畳があって、冬場
はこたつがあって、そういう場所が欲しいと話をし、お茶の道具などを買いに行きました。
学校は敷居が高いものです。私も教員だったのですが、ほかの学校もやはり敷居が高く感じ
ます。ですので、フリーで行くことができる場所が学校にあるとおもしろいなといろいろな
ことを考えました。中学校だと、そこに自由に入って、子どもたちもふらっと行って地域の
方に声をかける、そんな仕組みができればおもしろいのではないのでしょうか。

○管理者（菅谷 昭君） 根橋委員さん、どうですか。

○教育長職務代理者（根橋範男君） うちもボランティアルームをつくったのですが、利用者
がいないのが現状です。

- 管理者（菅谷 昭君） それは山形村の中にですか。
- 教育長職務代理者（根橋範男君） 山形小学校の中です。児童数も減っていたものですから、空き教室につくって、お茶を飲むものや食器棚などを用意して、いつでもご自由にどうぞというふうに開放していたのですが、寄ってくれる人がいなくて、ほとんど利用がないという状態です。作戦がよくなかったのかわかりませんが、本当に二茅委員の言うように、住民の方がいつでも来ていただけるといいのですが、残念ながら使われていません。給食を食べようとか、何か作戦がないとだめかなと思っています。
- 管理者（菅谷 昭君） 牧野先生、そういうところで、やはり地区の公民館活動とか関係してくるのですか。
- 東京大学大学院教授（牧野 篤君） 経験的には、やはり公民館が活発化されていると、個々の連携もとりやすいという話があります。あと、地域ルームは、ほとんどは外から入れるような、直接その部屋に入れるようになっていたりして、あとは、地域ルームなんかを住民の方々が内装をやったりとかすると、大分変わってきますよね。
- 管理者（菅谷 昭君） 大森委員さん、せっかくですから、牧野先生に何かご質問ありますか。牧野先生はアカデミックで、少し高いレベルのお話になりますが、何か保護者の視点からのお話をしてください。
- 教育委員（大森志保君） 地区の文化祭があったのですが、そのときに育成会で長い巻き寿司をつくるから、お宅の息子たち来てほしいとうちに電話がかかってきたのです。そのときは、ぜひ行かせますと答えたのですが、後になったら、その日、息子は部活動の新人戦だと言うので、結局その巻き寿司づくりには行けなかったのです。そのときに、息子が何人か誘ってみると誘った子たちが違う部活だったので、かわりに行ってくれたということがありました。部活を優先するか地域を優先するか、そういうのはあります。
- 管理者（菅谷 昭君） その辺は、先ほどのお話ですが、先生方に部活のほうをお願いと言われれば、校長先生としてもこれはしょうがないですね。どうですか。
- 学校長（湯本武司君） 部活の先生方も必死なので、そうすることによって子どもたちも達成感を味わえるし、部活としてもこれから頑張ろうという場もできるので、やはり部活の先生に頼むから地域の行事をと言いくいのが私の立場であります。何か行事をやるというときも、部活できないじゃないかと言ってくるのですよ。急な変更はやめてくれ、少なくとも1カ月前にはきちんと周知してくれということをよく言われて、私も本当に困っております。
- 管理者（菅谷 昭君） 松本市で防災訓練があつて、私も生徒に出てきてほしいのですが、部活や習い事で来れないことが多いです。地域の防災訓練には、ぜひ生徒さんも入ってやってもらいたいの、学校と同じような事情なのです。その辺は牧野先生、どうなのでしょう。
- 東京大学大学院教授（牧野 篤君） 実は私も部活のコーチでしたから、そのような事情はよくわかります。全国的にそうなのですが、学校の部活動以外にも、例えばサッカークラブ

や少年野球などいっぱいありますから、子どもの取り扱いになってしまっているのです。そのときに地域に関わるとか言われても無理だとおっしゃるのは、よくわかる話なのです。

ですから、学校の日常の中の弱いところを地域と一緒に関わってやっていくとかがいいのではないのでしょうか。先日も柏市の例ですが、料理クラブがある学校の前を住民が歩いたら、焦げた臭いがして、行ってみたらパンケーキが焦げていたそうです。それではと、地域がパティシエにお話をして来てもらって、パティシエから指導を受けられるようになったりしたのです。方法はいろいろあるのです。

その意味では、ある専門性を高めていくというようなことについても、地域には人材はいますので、そういう方たちに関わっていただくといったことも一つのつながり方かなと思います。ですから、部活を犠牲にしないで、それを逆に地域と結びつけるように使っていくこともあり得るかなと思うのです。

○管理者（菅谷 昭君） 平林委員さん、何かございますか。

○教育委員（平林昌廣君） 部活とか、塾で忙しいというのについてですが、私どもも数学学舎というのをやっているのですよ。もう6年もやっていますので、高校生までなっている子どもたちもいるのですよ。その子どもたちにも一緒に参加してくれない、手伝ってくれないと呼びかけるのですが、今の話にもありましたように、忙しくて行くことができないという話で終わっているのです。

ただ、大森委員さんからも話があったような、地区の文化祭だとか、そんなようなところに生徒が行って、学びを披露することで地域の人に感謝されたり、褒められたりというようなことで、生徒も充実感を味わっているという場面はあるのです。そのようなところで、いま牧野先生がおっしゃられるように、学校の生活のちょっとした延長線のところで地域の方が活躍できるような場面を工夫していくというのは必要なと思います。

それから、ボランティアルームの利用者がいないという根橋委員のお話ですが、一般的にいうと、ボランティアルームを地域の人たちのたまり場にしながらというのが理想なのですが、原因は何かと言えば、地域のボランティアの方たちの就業構造といいますか、本当に元気に農業に携わっていただくというのが大事で、地域の労働力として頼られている部分があって、なかなか理想のたまり場にすることは難しいです。だから、都市部でこの学校支援活動をやっているような人たちと交流すると、話がかみ合わないよなというお話がありますので、やはり地域の特性に合わせた支援のあり方を考えていく必要がありますし、ボランティアルームの再活性化をどうしたらいいかと悩んでいるところです。

○管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

まだいろいろなディスカッションがあると思いますが、時間が押してきております。今日は鉢盛中学校のコミュニティスクールということで懇談しましたが、湯本先生、4月からの統括コーディネーターの配置について期待を含めて何か一言お願いします。

○学校長（湯本武司君） 本当にありがとうございます。

実は初めその話があったときに断りました。と言いますのは、学校からすると、そういうコーディネーターは校長上がりの人が来るんじゃないか、そうすると、教頭先生が何も言えなくなって、かえって大変になるのではと思ってしまったので、すぐは受け入れなかったのです。しかし、赤羽教育長先生やいろいろな方からお話を聞いたら、そうじゃないんだ、学校のためになって教頭先生が楽になる人材を選べばいいじゃないかと言われて、本当に人によっては学校にとって有益になるんじゃないかなと思いました。実際、現在は教頭が山形村教育委員会、朝日村教育委員会、今井公民館に1週間に1回顔を出すなんてことは不可能で、学校の中で本当に精一杯なので、そのように各地区に行ってくださったり、コミュニティスクールの連絡をしてくださったり、また、私がいま考えているのは、鉢盛中学校から銀行が遠くて往復で1時間では帰ってこれないので、そういう業務をやってもらえるんじゃないかとか、学校が今まで弱かった部分を補ってもらえる方をつけてもらえるのだなと思って、今は本当に心から感謝しているところであります。本当にありがとうございます。

- 管理者（菅谷 昭君） 今日お聞きしていて、牧野先生が、今後の方向性についてお話をしてくださいましたが、大変ありがたいと思ったことがあります。私、市長になってから、地域の子どもたちも地域の一員という意識づけをしないとだめですとずっと言ってきたのです。しかし、子どもは学校教育でとなり、なかなかかわかってもらえませんでした。日本の社会構造を含めて、少子高齢化の人口減少社会では、日本は大変な問題になってきますから、もう子どもたちも地域の一員として位置づけなければ、なかなか難しくなってくるのではないかと考えております。学校教育が地域づくりに入ってきたことは、とてもありがたいことで、牧野先生のお話で僕はほっとしたところがあったものですから、お礼を申し上げ、ぜひそうしてやっていきたいと思っております。

最後に、赤羽先生、一言お願いします。

- 教育長（赤羽郁夫君） 今日は、本当に貴重な意見交換をありがとうございました。

まさに牧野先生のお話にありましたように、これからは知識というよりも、地域みんなと一緒に生きる力を子どもたちに育むところがまさに地域づくりにつながりますし、子どもたちのこれからの生きる力につながっていくということをまた教育委員会でも論議を深めながら進めていけたらと思っています。

今日の牧野先生と湯本校長先生のお話、それから管理者の菅谷市長からいただきましたご意見等も含めて、期待に応えられるような統括コーディネーターの配置をしていきたいと思っています。今日はありがとうございました。

- 管理者（菅谷 昭君） 予定していた議事は全て終わったわけでございますが、それぞれ有意義なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

また、牧野先生におかれましては、お忙しいところ本当にありがとうございました。

なお、本日の内容につきましては、事務局で議事録を作成し公表していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、事務局に進行をお返しします。

○事務局次長（小林伸一君） どうもありがとうございました。お疲れさまでございました。

当組合の総合教育会議は、年1回の予定でございますので、本日で終了となりますが、生徒の生命または身体にかかわることなど、緊急の場合は招集する場合もございますので、ご承知をいただきたいと思います。

また、本日の結果につきましては、先ほど管理者が申し上げましたとおり、議事録を公表するとともに、2月5日の2月定例会においても、管理者のほうから議員の皆様にご報告する予定ですので、よろしくお願いいたします。

○事務局次長（小林伸一君） それでは、以上をもちまして、平成29年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉じます。

ありがとうございました。

平成29年12月25日(月)午後4時30分 閉会